



特別養子縁組で  
子どもを迎えて

## ▶79◀ 医療から福祉へ 大切なつなぎ役

不妊治療を経て里親に踏み出した愛知県知立市の山佐美絵さん(43)は今後も、多様な家族の形を認め合う「知立コウノトリカフェ」を不定期で開催していくという。それは、医療と福祉のつなぎ役が必要だと思ふから。不妊治療施設には、福祉の仕組みに詳しい人材は必ずしも多くない。喪失感を抱えた患者の心理的支援や、ライブプランを見据えたカウンセリングも発展途上だと考えている。一方、山佐さんのような民間のピアサポート活動も、参加者の立場が時間とともに変化し、それぞれに歩みを進める中で続けていく難しさがある。

そこで各地で公的機関が「不妊症・不育症ピアサポート活動事業」に取り組んでいる。愛知県では8～10月、「妊活おしゃべり会」が計3回、オンラインで催された。

3回目の10月7日のテーマは「不妊治療以外の選択肢」。「不妊治療は、がんや心臓病などと異なり、標準的な治療はなく、治療の終結を考えることが難しい」。名古屋女子大の渡辺実香教授(母性看護学)は、そう話した上で「理想的には治療を始めるころ、少なくとも終結が視野に入るころには、里親や養親として子どもを持つ人生を選択するかどうかが、終結後の生活を考えることへの支援が必要だ」と指摘した。

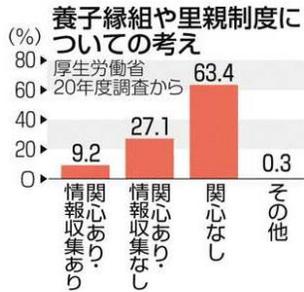
渡辺教授が2020年秋に生殖医療施設の職員807人にアンケートしたところ、里親制度の中の養子縁組を知っているのは9割に上る一方、患者に里親制度を紹介したことがあるのは3割にとどまった。「結局は病院の方針や医師ら医療者の価値観によるところが大きい」という。

私も経験したとおり、不妊治療中に里親制度が目にとまるかと言えば、そんな余裕はないのが現実かもしれない。不妊治療を経験した夫婦約1600組に対する厚生労働省の20年度調査で「子どもを授からなかった際の養子縁組などについて話し合いをしている」と答えたのは6・2%だった。

治療中にはしいと感じる情報も「里親・特別養子縁組制度」は10・2%と高くない。実際に養子縁組制度や里親制度に「関心があり、情報収集も行っている(行った)」は9・2%あった。一方、「関心はあったが、情報収集は特に行っていない(行わなかった)」は3倍の27・1%に上った。最終報告書では、この層へのアプローチが求められるとしている。

(奥田哲平)

今回は19日付の予定です。



ご意見・体験談をお寄せください。はがきは〒460 8511 (住所不要)、中日新聞社会部 子ども取材班、メールはkodomomochi@chunichi.co.jp、ファックスは052 (201) 4331へ。友だち登録はQRコードから。



特別養子縁組で  
子どもを迎えて

厚生労働省は不妊治療が公的医療保険の対象になった昨年4月から、不妊治療に取  
り組む夫婦に、選択肢の一つとして里親制  
度を考慮してもらうための情報提供を本格  
化した。医療機関が情報提供する際の手引  
も作成した。

その手引の中では、情報提供のタイミン  
グと手法を解説している。まずは初診時の  
相談で治療の全体像を説明する中で、「治  
療以外の選択肢について関心は薄いと思わ  
れますが、まずは早い段階で、すべての選  
択肢について知っていただくことが重要で  
す」としている。

ほかにも、患者の気持ちに十分に配慮し  
た上で、▽体外受精の説明時▽患者が治療  
に迷いや悩みを感じているとき▽医学的に  
妊娠、出産に至る可能性が低いと判断した  
とき―を挙げている。

里親や養子縁組制度に関心を持った場  
合、次に訪れるのは里親や民間の養子縁組  
あっせん機関だ。ただ、そこで受ける説明  
によって戸惑いを覚える人も少なくない。

名古屋女子大の渡辺実香教授(母性看護  
学)は「里親は『里親になる覚悟で説明を  
聞きに来たんですよ』という姿勢で関わる  
が、妊娠できず、傷つき、悲しい思いを抱  
える中で縁組を考えている人たちは、必ず  
しも十分な情報や心構えを持っているわけ  
ではない」と指摘する。

「私も里親の対応にすごく違和感を覚え  
た」と明かすのは、愛知県内に住む50代の  
女性だ。37歳から始めた不妊治療で3回流  
産し、心身はもちろん、10回近い顕微授精  
などがかかった金銭面でも負担が重くなっ  
てきた。やめ時を考え始めたときに偶然、  
テレビのニュース番組で特別養子縁組制度  
を知り、40歳を過ぎたころに夫婦で里親に  
足を運んだ。当時は医療機関からの情報提  
供はなかった。

あくまでも女性の記憶だが、里親の担当  
職員は面談で夫婦2人の学歴を見て「勉強  
させますよね」と尋ねてきた。2人はその  
質問に驚きつつ、「勉強できる環境は最大  
級の幸せだと思つ」と答えた。「親や学  
校の先生に手を上げられたことがあります  
か」とも聞かれたので、『ある』と答え  
たら、私たちが子育てで手を上げると思い込  
まれた」とも振り返る。実際のニュアンス  
は違ったのかもしれないが、どこかの外れ  
な印象を受けたという。(奥田哲平)

## ▶80◀ 情報提供 患者の気持ちに配慮して



オンライン取材に応じる名  
古屋女子大の渡辺実香教授



連載のバックナンバーは中  
日新聞Web=QRコード=  
でご覧になれます。



特別養子縁組で  
子どもを迎えて

## ▶81▶ 覚悟迫る言葉 喪失感に追い打ち

不妊治療をしても授からず、養子縁組を望んで訪れた児童相談所で違和感を覚えた愛知県内の50代の女性。それでも、里親登録研修に進み、今度は講義で聴いた「特別養子縁組制度は、不妊治療でダメだった方に子どもを渡すためではありません」という言葉に引かれた。

子どもに適切な養育環境を整えるために創設された制度だといふことは理解しつつ、「不妊治療までしてきた人たちが、子どもを大切にしないはずがない。ハードルを上げられたような気がした」という。

確かに、女性が講義で聞いた言葉は、制度説明として「事実」ではある。血縁関係がなく、社会的養護下にある子どもの養育は生易しいものではないと伝えたかったのかも知れない。ただ、もっと別の言い方があってもいいのではないか。

名古屋女子大の渡辺実香教授（母性看護学）も「不妊治療をしてきた人たちを意識改革させるかのごとく、こつした言葉をカッソンと言いがち。希望者は『私が子どもをほしいと思っただけなの？』とつらくなってしまう」と、不妊治療で傷ついた人々への配慮を求める。

女性は職員との面談の中で「児相が求めるモデルみたいなものがあり、それに当てはまらない家庭はNGとしているのであろうと想像がついた」という。「わが家は夫が忙しく、休日も少ないのでNGかな」とも感じた。座学の講義も施設実習も終えて登録審査を待つだけの段階になって、自分たちから申請を取り下げた。

その後は頭を切り替えるように、治療中に取得した資格を生かし、仕事にまい進してきた。夫婦2人、ペットの猫と暮らす人生には「穏やかに生活している」と納得している。時折、ニュースなどで児童虐待事件を目にすると、胸が苦しくなる。「実の親と育てることが難しい子どもたちに、人並みの幸せが訪れてほしい」。そう願っている。

もう1人、岐阜県内の女性（54）は「連載を読んで、一人の人間を育てるといふのは、すごい覚悟がいるのだと感じました。私は今の夫婦のみの生活を選択したことを後悔はしていません」とメールを寄せてくれた。女性に電話をかけると、30年近く前の記憶を呼び起こしてくれた。

（奥田哲平）



特別養子縁組や里親制度を紹介するリーフレット

ご意見・体験談をお寄せください。  
はがきは〒460 8511（住所不要）、中日新聞社会部子ども取材班、メールはkodomodo@chunichi.co.jp、ファクスは052 (201) 4331へ。友だち登録はQRコードから。



この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています